

# 主体・精神・エクリチュールとその病

——日本思想への一視点——

谷川 多佳子

## 一、言語、主体、精神

### 1. 翻訳、主体、言語

日本では、主体や個のあり方が欧米とは歴史的にも文化的にも異なっていることが、多方面から指摘されている。日本人の生活には深く「世間」が根ざしていること、日本の社会や日本人の心性には、集団主義的な基調がみとめられること（たとえば、社会学者による「タテ」社会の指摘、心理学者による自我不確実感や集団依存傾向、運命依存主義、精神医学における欧米的諸概念や治療法の適合しない多くの日本人の症例、等々。哲学においても、西洋近代の「主体」や、「二元論」（主／客、心／身、精神／物体）のような諸原理は、日本の思想的伝統とは異質なものと見える<sup>1)</sup>。

近代はじめデカルトがゴギト・エルゴ・スムを哲学の出発

点としたとき、その「考える主体」は「精神」であり、物体「身体」と峻別されるものであった。そこにおいて物体「身体」の側は機械論的にとらえられ、主体にとつての客体となる。無論、近代西洋哲学においても、二元論に対しては、スピノザやヘーゲルのような一元論もあつたし、またライプニッツのような有機体的な生命論、生物論もあつた。しかし流れの主軸は、二元論であつた。

二十世紀、こうした近代的二元論や主体に対して、さまざまな角度からの再検討がなされる。たとえば現象学の立場から、生きる身体や知覚をとおして主体を捉えなおしていく試み（フッサールやメルロ＝ポンティ）。あるいは精神を、無意識を基底としてとらえ返していく精神分析（フロイトやラカン）、さらに皮膚感覚から自我の形成を説明しようとする試みまでもみられる（ディディエ・アンジューなど）<sup>2)</sup>。

日本語においては「主体」という語自体すでに、「体」と

いう文字によって身体性〔物質性〕をふくむ曖昧で両義的なものとなっている。主体とは英語で「subject」であるが、この語は「主観」と翻訳されることもある。他に、「主語」「主題」「臣民」などの訳語もある。西洋思想が輸入される以前の日本の知的世界では、「subject」に対応するものが重要な位置を占めていたとはみとめられない。オギユスタン・ベルクは『空間の日本文化』で次のように述べている——日本の文明史のなかでヨーロッパの主体という概念はなかったといえる。しかし日本語は「主体」「主観」「主題」など、フランス語の「*subject*」に対応する豊富な語彙をもっている、と。

いづれにしても「主体」はヨーロッパの学問の翻訳によって、日本の近代に登場したといえよう。そして精神や思考についても十九世紀中葉に西洋文明が流入する以前の日本にあつては、「考えること」は西洋におけるような重要性和優位を持たなかった。そのような文明の文脈においては宗教や歴史の諸事象のなかで、フランス語の「*pensée*」は日本語で「考え」「思考」「思想」「思索」などと訳され、しかも多義的で多くの領域に広がり、西洋におけるような厳密に明晰な内容を伴うことがなかったと指摘されている。<sup>①</sup>

動詞の「考える」は伝統的な意味において、「思う」と区別される。一つのイメージが心の中にできあがつていて、それが変わらなずにあることが「思う」であるのに対して、「考

える」は、胸の中のいくつかのことを比較して選択し構成する。<sup>②</sup>この「考える」という語も、自己を主観的に思惟するとき、あるいは知覚する「主語／主観／主体」が問題になるとき、その不安定さが示される。「*subject*」を定立するとき、この動詞との関係で異なる二つの方法があるからだ。一つは、「考える」の「*subject*」が認識論的で知識にかかわるときで、「主観」と呼ばれるべきものである。もう一方は、行為、そして実践一般に結びつく「*subject*」で、「考える」ことがひとつの行為とされるとき、この動詞は、「作る」「行う」あるいは「話す」といった一群の動詞と等価になり、ここでの「*subject*」は、「主体」と訳される。「*subject*」は、その実践的性格から、認識論的「主観」と区別され、またそれゆえに「主観／客観」の対立におさまらない。日本哲学では「主体」と「主観」は交換可能のごとくに、あるいは曖昧な境界性をもつて用いられることもあり、両者の区別は不安定なものである。<sup>③</sup>

「主体」という造語は、「*subjectivity*」の一般性のもとに包摂されることは疑問であり、「主体」という語の英語への再翻訳はしばしば、「*subject*」とならない事態がある。語としての「主体」は、「*the body of enunciation*」として、発話行為の身体としてとらえることもできる。日本語そのものをみて、先ほどみたように、「主体」という語にはすでに「体」という、身体性を想起させる文字が含まれている。「主体」＝シユタ

イを、発話行為の身体としてとらえ、そうしたシユタイの物質性から、シユタイの自由、シユタイとしての自由が生まれるという方向も可能となるだろう。

subjectは「主語」とも訳される。主語の問題を言語、特に日本語において考えるとき、人称代名詞は重要である。人称代名詞は、個のアイデンティティーと主体性を示して言語的に表出する機能を持ち、自己の主体性のありかたに深くかわるからだ。欧米の英・独・仏語は、一人称代名詞、I, you, he, sheのようにそれぞれ一つの一人称単数代名詞をもつだけである。特殊な場合以外省略されないし、省略されるとしても動詞の人称変化などによって主体が明示される。二人称、三人称についても同様である。これに対して、日本語で一人称単数は、「私」「ぼく」「自分」など、使用頻度の高いものだけでも十指に余る。さらに、主体の年齢や階層、性、社会関係、状況、文脈などによって、さまざまな語、用法、使い分けがある。日常会話などでは省略されることもあり、しかも省略された場合、会話の主体を明示するような動詞や助動詞の変化があるわけでもない。

一人称単数代名詞がたとえば「私」の一語だけというのは、自己がどのような状況でも同一の自己であることを前提するという指摘が木村敏氏によってなされている。デカルトがコギ

ト・エルゴ・スム（私は考える、ゆえに私は存在する）というとき、「私は存在する」を導くところの「私は考える」に、すでにこのような自己の存在が前提されている。デカルトがコギトから導き出したスムは、反省され客観視された「私は存在する」であって、反省以前の主体的な「私は存在する」が、コギトの前にすでに前提されている。不変で同一な一人称代名詞の存在が、そのような主体が存在するという前提をあらわしていることになる。

中川久定氏もデカルトのコギトを言語の観点から、西田哲学と重ねあわせて検討している。西田は『善の研究』（二二）において、「疑うにももはや疑いようのない、直接の知識」すなわち「直覚的経験の事実」を立脚点とする。そこから西田は、デカルトが本当の意味では直接の知識から出発していないと批判する。「デカルトが余は考う故に余在りというのは已に直接経験の事実ではなく、已に余ありということを推理している。また明瞭なる思惟が物の本体を知りうるとなすのは独断である」。そうして一九四四年の論文「デカルト哲学について」で、デカルトの「徹底的な懐疑的自覚……否定的自覚」に同意を表すものの、しかし、「省察」への反論という形をとりながら、デカルトが Cogito, ergo sum と言って「外に基体的なるものを考えた時、彼は既に否定的自覚の途を踏み外した……と思ふ」として、コギトが立脚する主語的

論理を批判の対象として浮き彫りにする。<sup>1)</sup>

ベルクの『空間の日本文化』では、文法上の主語と目的語を伴っていない日本語の言表の例がいくつかあげられているが、そこでは、外側から課せられる場面の雰囲気が先立つて存在すること、また現実の「私」が文法上の「私」によって必ずしも表現されない場合のあることが示されている。中川氏によれば、これと対照的にデカルトの『第三反論』の「作用の主体〔基体・主語〕なしにはいかなる作用もない」という基本的な命題は、ラテン語やフランス語のような言語体系を根拠としている。そこでは、動詞がになうあらゆる行為が主体「主語」の存在を前提にしている。cogitare<sup>2)</sup>ではなくて、ego<sup>3)</sup>と言うことには、すでに動詞の語尾変化のなかにegoの現前が前提されている、ともいえるよう。

構造的にみても日本語の文は、欧米語のような「主語―述語」の構造はもっていない。「主語―述語」の枠で理解しようとする、日本語の文には多くの例外がでてしまう。大野晋氏は、「主語―述語」でなく「係り結び」による日本語の原理的な特性にアプローチしている。日本語の文の一つの典型は、題目を立てて、そのもとで展開するという形式をもつ―ハとモの役割は題目を提示して解説・説明をその下に要求する、というように。係り結びは万葉のときから平安、鎌倉時代へとしだいに変化し、ついには姿を消していくが、その変

遷のありさまは細やかな用例を豊かに示している。また社会の移り変わりも背景となっている。そして係り結びの基本構造は、現代日本語の構文法の基礎に対応するものでもあるという。<sup>4)</sup>

こうした主語―述語の構造をもたない日本語の文の構造や特徴については、これまでにも興味深い指摘がなされている。時枝文法によれば、日本文は主語が述語の入子となる、風呂敷敷のように述語に包み込まれる。述語立ての日本語の思考が、情緒的・隠喩的・多義的な示差的(differential)論理に基づく詩学の論理に適合することも指摘される。<sup>5)</sup>

## 2. 精神、意識、心

主体の「思考」の場合は「精神」となるよう。

日本語の「精神」は多くの曖昧さを含んでいる。中国の伝統的な古典では、精神作用を「神を蔵す」とか「精」という言葉を用いて示し、人間精神の働きをあらわすために日本には古い昔からこの語が導入されていた。明治以降、西洋からあらたに導入された spirit, Geist, esprit などを翻訳するために、文章語においてこの語が用いられたのであろうが、日常の日本語ではあまりなじみのない言葉だった。しかも源泉となった中国の儒教系のヴォキャブラリーでは、思索、思考力

というような精神作用を独立した実体とみなす考えは比較的乏しい。中国の五蔵には、何ものかを蔵するという意がこめられ、知識や認識などという抽象的なものが器官に蔵されるという考え方はなかった。認識主体を独立してとらえる発想が生じにくかった。理性・感性・悟性など、精神の認識機能や能力をあつかう語も、儒教系のヴォンキヤブラーリーには見出されにくい。

中国の伝統的古典に対して、仏教系のものは、精神作用をあらわすのに「識」をもちいる。そして日本語で、個の精神的働きをあらわすのに「意識」がもちいられる。十九世紀中葉までは、この語を宗教以外のテクストにみいだすことは稀で、西洋から移入された consciousness, Bewußtsein, conscience の語を翻訳するために初めて用いられたのだった。西洋においても、この語が近代的個の主観的意識の意味をもつには、デカルトから始まり、ロックやライプニッツをへた語の複雑な変遷の経緯があり、単一ではなかった。もともになるラテン語 conscientia は、「共に知る」を原義とし、道徳的良心の意味と内面的自己意識の意味をあわせもっていた。ここからフランス語の conscience は主に道徳的良心の意味で使われていたが、デカルトが哲学において「意識」の意味で用い始める。その後フランスのデカルト派哲学者（レジスやラ・フォールジュ、そしてとりわけマルブランシュ）により、この語と

概念が主要なものとなっていた。ロックによって用いられるようになった、反省的知覚を意味する認識論的術語としての consciousness (OED のロックの用例を参照) は、ライプニッツにも影響を与える。デカルトやマルブランシュからの影響や、当時の代表的な哲学者たちのあいだで錯綜した相互関係をもって、ライプニッツにおける「意識」概念が形成されていったのだった。

ヨーロッパ近世に確立したこの語を翻訳するにあたって、江戸末期の『英和対訳袖珍辞書』(一八六六)では、名詞 consciousness は「知覚」、形容詞 conscious は「自覚の」、また conscience は「心意知覚」となっているが、明治十年代の『哲学字彙』では、consciousness を「意識」と訳し、conscience を「道念、良心」と訳し分け、現在に至る。ただし「意識」はもともと仏教用語であり、六識、八識のひとつとして、五感の対象を認識、推理、追想するような心の働きを意味していたことは銘記しておく。

日本の日常語では、人間の精神作用をあらわすのに「こころ」の語がひろく用いられている。中国の伝統的発想では心臓を中心に五臓六腑で考えたとされていたが、漢和辞典をみると、「こころ」の訓読みの箇所は二十三の漢字がある。心の第一義は心臓、第二義に「こころ」とあり、さらに第二義

として「こころ」と訓ませているものに胃・肺・賦・胸・腸、第三義に腦、第四義に胆などがある。心の字はまた、思考作用をあらわす「おもう」と訓む漢字に多く組み込まれている。

江戸時代までの日本において、思考作用や精神が宿るのは胸であり心臓がその中心と考えられていた。日常的な言い回しでも、頭が悪いとか頭腦明晰などの表現は、江戸時代まではなかったといわれる。心臓や胸を場とする「こころ」は、深く広大な領域と、また同時に、とらえ難い微妙さをもつ。古代以来日本において、「こころ」の微妙さや繊細さ、豊かさとはさまざまな次元であられ、古代の『万葉集』をはじめ、それを表現した文学作品は数多くある。

いづれにせよ、こうした概念をあらわすのに微妙さや繊細さをもつて表現する日本語の語彙は豊かであるようだ。先ほどみたように、フランス語の *le cœur* に対しても「主体」「主観」「主題」などの豊富な語彙をもっている。日本語の語彙の豊かさや多様性の源泉は、つぎの四種の言葉ないし概念が日本語内部で層をなして住み分けていることによるとの見方がある——やまと言葉、儒教漢語、仏教漢語、近代漢語。この四層は、概念上の四層であって、言葉としては重複している場合も多い。たとえば、「フィロソフィー」は近代漢語では「哲学」、儒教漢語では「理学」を指すが、理学は近代漢語では自然科学を意味する。「心」は、儒教漢語（心臓ないしその

機能）、仏教漢語（精神作用）、近代漢語（情意）、やまと言葉（こりこり）の諸層がある。

### 3. 阿蘭世、甘え、自己——母性原理と自我

心的なものがこうした伝統や意味合いをもつ日本の土壌においては、「精神」を「分析」する「精神分析」は奇妙なものとなるのではないか、八十年以上前から紹介されているフロイトの思想は日本の思想や科学の領域に真の変化をもたらすことはなかったのではないか、という問いがある。これについて日本においてもたとえば、九世紀に真言密教を創始し高野山の開基となった空海の『十住心論』を思い浮かべることとはできる。ここでは、人間の心的世界は層構造をもち、それは固定的なものでなく貫通可能であることが示され、精神分析のそれに一致する、という見方も可能であろう。しかしこうしたいくつかの顕著な例にもかかわらず、伝統的な基層を流れる「精神」や「こころ」のあり方が大きく変わることはなかったように思われる。

また逆に西洋思想そのものにおいても、精神分析を創設し無意識を理論的にあらわにしたフロイトをみるならば、その神経症理論の背後に近代的自我の前提を見ることができ。一見両極端に立つかに見えた〈無意識〉の人フロイトと〈意

「識」の人サルトルであるが、両者がともに西歐形而上学の特徴である「対象化 *Vergegenständlichung* 論理」の土俵にあることを示す例は少なくない。アドルノは一九三〇年代に「現象学は市民哲学の自我を救済しようとする最後の英雄的な試みだ」といつているが、フロイトにあつてもその「防衛」理論の背後にはいわば、守るべき近代的自我の前提があるともいえる。そこには、抑圧を典型とする自我の防衛に失敗すれば人は狂気に陥るという発想があり、治療とは、自我の防衛や適応によるアイデンティティーの確立という方向になるだろう。

西洋思想とのこうした差異を示した視点として、一九三〇年代、ウィーン精神分析研究所に留学し、日本人として初めてフロイトの指導下に精神分析を学び、帰国後日本で最初の精神分析医となった古沢平作の仕事のみよう。かれは一九三二年フロイトに「阿閼世コンプレックス」についての論文を提出している。この論文はいかなる国際的関心をよぶこともなく四十余年の歳月が流れたが、フロイトの理論づけたエディプス・コンプレックス論が明らかにした西洋人の深層にひそむ父性原理に対峙するものとして、あるいは日本ないし東洋の母性原理を示すものとして、近年関心を集めている。その理論のもとになっているのは、古代インドの阿閼世神話である――

王の愛がうすれるのを恐れた老いゆく王妃は、予言者から、裏山の仙人が三年後に死んで王妃はその生まれ変わりの子供を宿すであろう、と告げられる。王妃は三年を待ちきれず、すぐにこの仙人を殺害してしまう。仙人の生まれ変わりである阿閼世が誕生した。王子は幸福な少年時代を過ごすのだが、自分の出生の秘密を知ると、母に対し抑え難い恨みの感情をいだく。そして母を殺そうと決意する。だが王子は恐ろしい病いに倒れる。腐敗し悪臭を放つ王子の身体に近づく者はいない。ただ母だけが、献身的な看病をする。そして王子は全快する……

人間として生まれおちる自己の出生そのものの由来に対していなく怨み「未生欲」が阿閼世をとらえていた。その、自己の生命の本源たる母が自己を裏切ったという阿閼世の怒りから発する欲望傾向が、西洋のエディプスの欲望と異なっている、と古沢はいう。エディプスの世界は、父と子が対立し、過ち―罰のけわしい掟の原理がたらぬき、子供の側の無意識のエゴイズムが基調をなしている。古沢がそれに対置するのは、母と子の母性原理、慈悲と許し、自他の融合の世界である。この仏教物語のなかで阿閼世は、母を殺そうとする瞬間に、突然激しい罪の意識に襲われ、恐ろしい皮膚病に倒れる

が、やがて釈迦に救われ、母の献身的看病がそこにある。

人間の根源的苦悩が母と子の世界の矛盾から発することを古沢は説く。そして日本人の治療の要は、「母親への依存的固着の解決による」と主張する。西欧的近代化が、人々の母親に甘えたい気持ちを抑圧し、根源的な生命（母親への依存的つながり）を阻害することが神経症の原因になると考え、母親との一体感を回復することを治療目標としたのだった。

現代、土居健郎の「甘え」理論もまた、このような母—子関係を基礎とした共通の認識から出発している。「甘え」は日本語独特の言葉で、乳児が母子関係において最初に体験する感情、対象との本能的な一体感であるとする。だが解決の方向は逆である。土居は究極的には、日本人の母への依存性（甘えに表現されるような）を受け入れるのではなくて、むしろ克服することによる「個」の自立をめざしている。「われわれはこれから甘えを克服することにこそその目標をおかねばならぬのではなからうか。それも禅的な主客未分の世界に回帰することによってではなく、むしろ主客の発見、いいかえれば他者の発見によって甘えを克服しなければならぬ」と考えられるのである<sup>①</sup>。

個に立脚点をおく土居に対して、木村敏は、土居の「甘え」が西洋的な「自己」を前提していると指摘する。西洋の「自己」

は、自己の独自性・自己の実質であり、恒常的な同一性と連続性を持ちつづける。これに対して、日本語でいう「自分」は、本来自己を超えた何ものかについての、そのつどの「自己の分け前」を意味していて、恒常の同一性をもつ実質とはいえない。「自分」は、西洋人のいう「自我」と異なり、自分自身の内部にみいだされる抽象的な実体ではなくて、自身自身の外部、具体的には自分と相手との間にそのつどみいだされ、そこからの「分け前」としてそのつど獲得されていく現実性なのだ、と。

このような「自分」は原理的には「甘え」と対立するものではないだろう。木村氏はたとえば、「人と人の間」などの視点を提示して、西洋的自我の不在から生じる日本人特有の症状に光をあてている。

「甘え」については、その後欧米の側からも議論が出ている。「甘え」がdependenceと英訳されたことから、従来欧米で過小評価されてきた「依存」を軸に、「自己」概念や、普遍主義に再検討を加えるなど、近年興味深いアプローチがみられる<sup>②③</sup>。

① これについては拙稿「主体とエクリチュール——日本思想への一視点」哲学・思想論第十六号、一九九八。

② JSTシンポジウム「数理と芸術の融合 (fusion)」(二〇〇四・八・九—十一、沼津)における私の報告「主観と客観」参照。



- (3) Augustin Berque, *Vivre l'espace au Japon*, P.U.F., 1982, p.31. 宮原信訳「空間の日本文化」ちくま学芸文庫、一九九四。
- (4) Arimasa Mori, *La pensée japonaise et ses éléments de base*, *Encyclopédie permanente JAPON*, 1975.
- (5) 大野晋「日本語練習帳」岩波新書、一九九九、七ページ。
- (6) 酒井直樹「日本思想という問題」岩波書店、一九九七、九二—九五ページ。和辻哲郎は、主体と主観の区別を人間科学と自然科学の対立に基礎づけることによって安定化させようとしたが、人間存在の社会的性格はその二重構造にあると、超越論的人格と人格性に関するカントの議論にしたがいつつ述べている(和辻哲郎「倫理学」、酒井、前掲書九四—九六ページ参照)。
- (7) こうしてシュタイは「主観」との差動(différend)を持ち、文化的差異とその記述が問題となる(酒井直樹、前掲書、一五〇—一五三ページ)。シュタイについては酒井、前掲書一四八ページ以下参照。なお、発話行為の主体についてはラカンを参照することもできよう(拙論「デカルトと精神分析」「哲学・思想論集」十四号、一九八九)。
- (8) 以上は木村敏「人と人との間—精神病理学的日本論」弘文堂、昭和四十七年、「自覚の精神病理」紀伊国屋書店、一九七八、を参照。以下は次を参照。中川久定「デカルトと西田——二つの哲学の言語的前提」「思想」一九九九年八月号。
- (9) 「善の研究」岩波文庫、六十、六二—六三ページ。
- (10) 「西田幾多郎 哲学論文集Ⅲ」岩波文庫、二八—二九三ページ。
- (11) 中川、前掲論文、一〇—一一ページ。
- (12) 大野晋「係り結びの研究」岩波書店、一九九三。その係り結び論の枠組みは次のようなものとなる。係助詞には二種ある。一つは「題目・対象の提示」を本来の任務とするもの、もう一つは「文末の陳述の変容」を任務とするもので、それが倒置によって係に転じた。どちらも、日本語の構成の基本的部分にかかわる役目を
- 負うが、一括して助詞と名づけられ、日本語の文の枠組みを決定する重要な役目を負う。なお、係り結びの研究は十八世紀、本居宣長が古典語の形式上の法則として把握し、きわめて多数の例をあけて実証的にそれを示している(詞の玉緒)。
- (14) 坂部忠「仮面の解釈学」一九七六。以上は平田俊博「日本語の四層と哲学的優位」(日本哲学会、二〇〇三年五月)を参照。
- (15) 中山茂「日本人の科学論」創元社、一九七七。
- (16) Takasugu Sasaki, *Lettre du Japon. D'où provient qu'au moins une langue — la japonaise ne donne aucune aide à ses usages pour avoir conscience de la conscience même ?*, *L'été*, 1984. 佐々木氏は次のように付け加える——日本のこのような文明にとって、「意識」はやはり西洋の産物であり、歴史の一時期の、ある人間共同体に与えられたものとしてしかとらえられないであろう、と。
- (17) これについては拙論「ライブニッツと意識・記憶・表象」の第一章参照(「思想」九三十号、二〇〇一)。および Etienne Balibar, *Identité et différence, L'invention de la conscience européenne*, Seuil, 1998
- (18) 「哲学・思想翻訳事典」論創社、二〇〇三、一〇—一〇ページ。
- (19) 西洋でも、古くは、旧約聖書には心臓が思考することを示す記述があり、古代ギリシアでも、ヒポクラテスによって脳が精神作用の座であることが明らかにされるまでは、心臓を思考作用の中核と考える哲学者が多かったようである。
- (20) Takasugu Sasaki, *Ibid.*
- (21) 平田俊博「日本語の4層と哲学的優位」(日本哲学会二〇〇三年五月発表)参照。
- (22) Takasugu Sasaki, *Lettre du Japon. Incompréhensible, insaisissable, incompréhensible Kokoro..... Alors comment dire psychanalyse en japonais ?*, *L'été*, n.9.
- (23) 空海の密教は、胎藏界と金剛界の両界曼荼羅をもった二元的な価値の世界を説く。しかも両者を止揚し、総合的に統一した大生命

の世界を表現しているとすれば女性原理と男性原理にもたとえられる。両界曼荼羅は、密教の大神命の世界を圖像で端的に表現したものと見える。空海がその密教の修法によって、同時代の貴族に施した奇蹟（あるいは療法）は、曼荼羅をめぐるイメージ操作による原始的心像の回復（ユング的ともいえる）による治癒と安心ではなかったか、という見方もある。当時の貴族たちはそれなりに、日本独特の文化と、中国文化とのあいだに挟まれて、自我同一性の危機に悩む存在であったかもしれないのだから（小田晋「日本の狂気誌」講談社学術文庫、一九九八、一〇五—一〇六ページ）。

(24) 丸山圭三郎「近代の自我に風穴を」『思想』一九九〇年一月号。なお「対象」についてラカンが、その分離ないし不在を示しているのは検討すべきであろう。

(25) 小此木啓吾『日本人の阿闍世コンプレクス』中公文庫。それはまた、戦前の日本文化・社会に適應するものでもあった。小此木、前掲書参照。

(26) 土居「甘えの構造」弘文堂、九三—九四ページ。

(27) 木村敏「人と人との間——精神病理学的日本論」弘文堂、昭和四十七年、一四七ページ以下。

(28) こうした諸問題については次の拙論参照「日本的自我とデカルト哲学」〔花田圭介先生退職記念論文集〕一九八七。

(29) Frank A. Johnson, *Dependency and Japanese Socialization*, New York U.P. 1983. 江口重幸訳「甘え」と依存」弘文堂、平成九年。

## 二. エクリチュールと「精神」医学

### 1. 漢字と仮名、書字と読字

日本語には漢字と仮名の二種類の書き言葉がある。漢字は

五世紀頃に中国から移入され、仮名はその漢字を元にして日本で考案された。こうした事態が生じたのは、日本のなかでこの空間全部に通用する文字あるいはエクリチュールが発明されなかったことに由来する。漢字は、音声を伴うけれど、形象文字であることから、視覚に訴えて意味を喚起する特質をもつ。これは、基本的には表音の記号であるような文字としてのアルファベットにはないことだ。

形象文字である漢字は意味を内包しているが、その発生の場にあった原音は、移入された場でその文字の意味に相当する事物が発音されている音とは異なる。漢字の読みに音と訓という複合が生じたのも、そこに由来するだろう。書き言葉と話し言葉のずれ、両者の見えざる緊張関係は、以後日本における言語行為の特徴の一つとなる。<sup>1)</sup>

こうして日本語は今から十五世紀ほど前に漢字・漢語を取り入れて、やまと言葉の体系のなかにそれを消化するのに、およそ千年以上かかったといわれる。やまと言葉という古い言語体系が確立した時代にはまだ日本には文字がなかったわけだが、そこへ漢字が中国文明——儒教と仏教、さらには医学や薬学などの科学技術も——を携えて輸入された。漢字とともにこうした文明を受け取って、それによって日本文明がつくられてきた面もあり、漢字を学ぶことは必要ともなつた。それが日本語のなかの漢語の位置を確かなものにしたと

もいえる。そして今から一世紀半まえ、西洋文明による近代化が始まり、明治政府はあらゆる分野に欧米の業績を取り入れたが、その時、生のままのヨーロッパ語を使わず、ヨーロッパ語を一度漢字に置き換えて日本語の中にもちこむという技量を日本は持っていた。その結果、西洋の概念をとり入れるにあたって、言語的障害が少なく、早い速度で取り入れることができたという見方もできる。

漢字と仮名を併せ持ち、種々の文字を併せてもちいることの長所も多い。文字を見てその意味を早く理解できる、本のページをあけて漢字だけを頭にいれていけば本を早く読める、漢字平仮名の併用により分かち書きの必要がない、片仮名があるためどの語が外来語であるかわかる……等々<sup>③</sup>。

話し言葉と書き言葉がずれているという現象、漢字と仮名の錯綜は、読み書きのさまざまなレベルで見られるが、とりわけ、読字や書字における精神医学や神経科学のアプローチには興味深い問題がみられる。

明治に入り、精神医学の領域ではドイツ精神医学が導入された。そのなかで最も影響の大きかったのが、呉秀三（元空（元空））によるクラフト・エービングおよびクレペリンの体系の導入である。呉はウィーン、ハイデルベルク、パリなどに留学し、四年間の留学の後半はクレペリンのもとで学び、そ

の精神病分類の体系を日本に導入した。一九〇一年呉は東大医学部の精神病学講座の教授となり、二つの方面の学問を移入した。第一は脳解剖学および脳病理学である。第二は臨床精神病学で、クレペリンの影響をうけ、クレペリンの教科書をもちいて講義をしている。クレペリンの方法は、精神病を脳病として捉える、自然科学モデルにしたがった疾病学といえる。その疾病学は、精神病を、一定の原因、経過、症状群を有する疾患単位として取り出し、この方法によって、それまでばらばらにとらえられていた精神病を、いくつかの独立した範囲のひろい精神病に整理した<sup>④</sup>。

書き言葉と精神病について呉は、明治二十五年（一八八三年）『精神病者の書態』という書物を出版している。この『精神病者の書態』では、字を書くことが筋肉の運動であることから始めて、関節や筋肉の説明をふまえ、白痴、鬱狂、躁狂、錯迷狂、麻痺狂に分類される。そして患者一人一人の症状とその書体が、関連づけて具体的に報告され、分析されている。『精神病者ノ新文字』も付け加えられている。ヨーロッパでは一八七六年、ポール・マックス・シモンというフランスの医師が「狂気の想像力——狂人の素描、図面、記述、そして衣装に関する研究」という論文を発表している。このあたりから、精神病者の芸術や書態についての論文や著書は増大し、臨床的な関心も具体化している。精神療法においても

デッサンなどが、解釈にゆだねられる素材として用いられている。筆相学も活用され、法医学や犯罪人類学の著書もみられる。そして呉の書物の、患者一人一人の症状とその書体とが関連づけて具体的に報告され分析されるというスタイルが、シモンの上記の論文でもそうであったことが指摘されている。

一九〇三年、呉とともに日本神経学会を設立し、『神経学雑誌』の発刊にも寄与した三浦勲之助（一八四一—一九一五）は、欧米に留学し、パリではシャルコーのもとで学んだ。日本に近代内科学とくに神経内科学を樹立し一八九五年東大教授になったが、一九〇〇年、わが国の失語症患者は「字を書して仮名を書せず、仮名を読むと能くして能く字を読むなり」と述べて、読み書き障害において漢字と仮名に差がみとめられることがあるのを指摘している。

その後、こうした失語症における漢字と仮名の解離現象の問題は、多くの研究者により繰り返し詳細に検討されてきたが、近年、研究者たちはいずれも、この解離現象が、漢字と仮名の表現内容の差、すなわち表意文字と表音文字という文字法の差に基づいて生じると考え、「読み」の二重平行構造が根本にあると提示している。たとえば、「えんぎ」という語をまったく読めないのにもかかわらず、「演技」と書いた

場合には容易に読んでしまう。そうしたことから、漢字と仮名の〈読み〉の過程に二重平行回路の処理が考えられ、こうした症例が多々検討されている。

日本語の漢字と仮名の、〈読み〉における違いは、こうしたなかでも最もよく研究されてきたものの一つであるが、今日指摘されるつぎの二重構造は、〈読み〉の研究の根本命題となっている。読みに内在する文字—音韻変換、つまり音韻的な〈読み〉の機構と、音韻的な変換を経ずに文字列から直接意味の把握に到達する意味的な〈読み〉のシステムの二重並行構造である。

さらに神経心理学においても、「神経心理学における漢字仮名問題」を中心とした四つのシンポジウムが組まれるなど、大きな関心が寄せられ、一連のシンポジウム全体をつうじて、漢字と仮名という二つの文字体系が異なつた神経心理学的プロセスによって営まれていることが確認されている。

## 2. 漢字と言語新作

文字の新作とくに漢字の新作は、日本語において文学作品や日常レベルでもたくさん興味深い例がみられる。精神病理において言語新作（造語症）は、「語」形成的な狭義のものとともに、「文」的性をもつた人工的私的言語も包摂さ

れている。

臨床的にしばしばみられるのは分裂病の場合である。とくに分裂病では、「私」の消滅の、言語への病的形態としてもとらえられる。分裂病の病的体験が、言語以前の一人称深部へ還元されるとともに、それを言語の面からとらえる場合、これまで慣れ親しんできた世界が不気味に変貌をとげる破局体験を基点に考察して、「意味するもの（シニフィアン）」と「意味されるもの（シニフィエ）」との乖離が分裂病者のディスクールの特性だとする見方がある。そうした観点から、言語新作は、「私」の消滅が言語に残す最終の病的形態とみなされる。分裂病者のディスクールの解体がその終末状態においてなお再生への志向を明かす一つの様態であるといえ、ここで再生する新たな言語は、本来の言語の定義と本質にそむくような、言語記号の断片、片割れにすぎない。

言語新作には、話し言葉の新作と、書き言葉の新作（文字新作）との二種類がある。そして、欧米の患者と日本の患者とでは、そうしたもののあらわれ方が異なっている。その理由は、欧米各国の言語がもつばら表音文字をつかうのに対して、日本語では表音文字である仮名と表意文字である漢字を同時に併用していることによると想定される。欧米の場合、言語新作は、話し言葉の新作であるのが通則で、文字の新作として出てくる場合でも、話し言葉を表音記号で写しとって

いるだけである<sup>①</sup>。これに対して、日本の場合、話し言葉の新作とならんで、書き言葉の新作がみられる。これは、話し言葉の単なる表音記号化などではなくて、漢字に備わる表意性を利用した、純粹な文字新作である。こうした文字新作については一九四七年頃から精神医学の教科書に扱われており、以降日本において、この問題には多くの研究がみられる。

こうした日本の文字新作と、欧米の文字新作の相違に注目するBobouによれば、次のような違いがある。インド・ヨーロッパ語族の言葉を用いる患者の文字新作は、詞語新作（neologisms）の表音記号であるのが通則で、書かれた新作は話された新作を移したものである。これと反対に、日本語や中国語をつかう患者の文字新作を表音的でない文字新作、つまり造形的な文字新作とみなし、いくつかの例をあげる。

Bobouは、日本の文字新作は、文字の形がゆがんだったり、釣り合いがくずれたりする点に特色があるとし、その典型的なものは、まったく新しく奇妙な「デッサン」であって、純粹な空想の産物だという。これら造形的傾向のいちじるしい新作は、絵画や図案のような造形美術的な新作へ移行するという。井村氏は、大筋ではBobouの見方を認めつつも、具体的な個々の実例にあたると事情はもつと複雑になる、という。精神病者の文字新作はおもに漢字または漢字風の新作で、カ

ナやそれに類した表音文字の新作はまれである。漢字は総数五万に及ぶといわれ、しかもいくとおりもの書体があり、文字新作の判定が難しいものも多い。

そうしたなかで井村氏が注目するのは、造形的な心構えで作られている場合だけでなく、言語的な心構え、たとえば、文字の字形よりも、意味や音に焦点を合わせながら操作をくわえ新作をしている場合があることだ。たとえば、漢字の組み合わせ、漢字と仮名の組み合わせ、漢字の表音的用法などの例である。<sup>①</sup>

日本の場合、さらにつぎのことが指摘される。分裂病者のディスクリールの語彙レベルにおいては、表音性と表意性が乖離して互いに反発しあっていることが、漢字と仮名を併用ないし混用する日本語の特殊性のなかで明瞭になることである。一方の極に、「ジャ、そうにん、しりあと……」という言語新作の症例があり（シャⅡ医者、そうにんⅡ悪人……）、そこでは音素が最小の表意単位である記号素にまで形成しえぬまま、あらわな形で表現されている。表音記号でしか書き表せないような、あらわな表音性の露出といえる。そして他方の極に、分裂病者の漢字新作のような、表意性の空間的造形がある（漢字をもとにした複雑な表意性の空間的造形や装飾的造形など）。前者には意味が欠け、後者には音が抜け落ちている。<sup>②</sup>

ディスクリールを構成する語彙は、正常な人間においては音と意味の結合がある。この結合を成り立たせている「私」の主体的作用は、この「私」の主体性が衰弱しやがて消滅すれば、音と意味とは分離し、互いに「片割れ」として離れ去っていく。分裂病の発端をなす言語危機——宮本氏によれば「意味するもの」と「意味されるもの」の乖離——ともつながるが、病初の言語危機にはまだ激しい危機感があり、妄想的にせよ幻覚的にせよ病者は新たな言語記号の探索に駆り立てられている。ところがここにあるのは、危機ではなく、一種の安定であり、新たな言語記号の探索へ向かうかわりに、記号の「片割れ」で自足する無為がある。「私」の消滅は、人称性の崩壊ばかりでなく、言語の語彙のレベルに至るまで、こうした解体を生じているといえよう。<sup>③</sup>

- (1) こうした事態の問題点については、野崎守英「歌・かたり・理」べりかん社、一九九六、二〇四—二〇五ページを参照。
- (2) 大野晋「日本語練習帳」岩波書店、三七—三八ページ。
- (3) 金田一春彦「日本語の特質」NHKブックス、一九九一、九〇—九二ページ。
- (4) 小田晋「日本の狂気誌 講談社学術文庫、一九九八、三五—三三五六ページ。
- (5) 呉秀三「精神病者の書態」（発兌書林、明治二五）、明治文化全集二七巻「科学篇」日本評論社、昭和四十二年、四三—四六、三三ページ。岡田温司「ミメーシスを超えて」勁草書房、二〇〇〇、二四ページで、ポール・リマックス・シモンの一八七六年の論文と比較されている。

- (6) 当時ヨーロッパの分析型の精神療法では、デッサンなどが、自由連想法とともに、解釈にゆだねられる素材として用いられ、その治療原理も概略が示されるようになる。これについてはフランソワーズ・ルヴィアアン「シュレアリズム直前のフランスにおける狂人と蠟燭のデッサン」(拙訳)「記号の殺戮」みすず書房、一九九五、一八ページ。マックス・シモンの著書とその図版などについて、同書二〇―二四ページを参照。
- (7) 岡田 前掲書、二四ページ。
- (8) 三浦勤之助、岡田栄吉「失語症、臨床講義」医事新聞、五八四号、一九〇一、二四九―二五六ページ(岩田誠「神経文字学の確立に向けて」認知科学ハンドブック一九九二、三九五ページ参照)。
- (9) 岩田 前掲論文三九六ページ。
- (10) *Ibid.*
- (11) 「神経内科」十巻五号と六号、特集「失読と失書(1)と(2)」、一九七九、十三巻三号と四号、漢字・仮名問題(1)と(2)、一九八〇、および岩田、前掲論文、三九五―三九七ページ。
- (12) 金田一、前掲書、一〇〇―一〇一ページ。
- (13) 宮本忠雄「言語と精神分裂病」現代精神医学体系第十巻「精神分裂病Ⅱ」中山書店、一九七八、三六五―三六六、三八六ページ。
- (14) 宮本 前掲論文、三八六ページ。この例として、ドイツのある分裂病者がつくった人工言語の一例が示されている。
- (15) たとえば、内村祐之「精神医学教科書」第一巻、南山堂、一九四八、一七〇―一七二ページ、三宅「精神病理学提要」南江堂、一九三一、第三版、一九四七、七五―八〇ページ。
- (16) Bobon, *Psychologie de l'expression plastique (Mimique et picturale)* *Acta Neurologica et Psychiatrica Belgica*, 11: 923, 1955. 井村恒郎、野上芳美、林英三郎、松岡緑「文字新作について」日本文字の場合の特色」『精神医学』(一九五九)一(八)、一五―二二ページ。
- (17) 井村他、前掲論文一八一―一九ページ。言語的な文字新作には具体的に次のようなものがあげられる。一、漢字の組み合わせ①意味にもとづいて――終(冬の虫)、②漢字の音にもとづいて――津々

便出(讀んで)。二、漢字とカナの組み合わせ――勝。三、カナの組合わせ――招(色々)。四、漢字の假借的(表音的)用法。なお造形的な文字新作には、一、既成文字の図形化 二、既成文字の裝飾化 三、象形的操作による新作などがある。

- (18) 宮本、前掲論文、三七七―三七八、三八七ページ。日本人の分裂病者の文字新作の具体例が、後者の表意性の空間造形として、図が示されている。
- (19) 宮本、前掲論文、三八六―三八七ページ。

### 三、精神の病と日本の近代化

#### 1. 精神病(「脳病」「神経病」、勤勉立志、メラニコリー

漢字と仮名を併せ持つエクリチュールにおける日本の精神の病には欧米と異なる(場合によっては中国とも異なる)、日本独特の様相がみられたが、精神の病全般にも明治の近代化において、やはり独特な特徴がみられる。それはまた、第一章でみた「主体」―「精神」のありかたにおける欧米との差異の、ある根底及びその具体的な表れを示している。とくに、精神・心の病をとおして、明治期の日本の知識人たちの神経病、鬱病、そして民衆の神経病、憑依現象には、注目すべき特徴がみられる。明治の近代化は、ある意味で、西洋化、欧米化であつた。文明開化は、欧米的な文明化をめざす

ものであり、西洋文明の業績の概念は、先ほどもみたように、多くは漢語に変換されて移入されたのだった。精神や心の病の概念が、「脳病」、「神経病」、「神経衰弱」といった病名をもって輸入されたのは明治期である。

「心」を指す用語としての「氣」の用例は古くからあるが、「氣ちがい」という語が精神病者を指す主要な用語となつたのは、中世末から近世にかけてであつたと想定される。「氣」が「人と人との間に漂うもの」とすれば「氣ちがい」という語は、精神病者に接する際に、接するほうの心のなかに生じる違和感のようなものの表現ともいえよう。中世における「もの狂い」としての狂氣が、超自然的他者との関連において認知されたのに対して、近世における「氣ちがい」としての狂氣の認知は、個人的対人関係において生じる。近世においては、日常レベルの用語（氣ちがい）と、行政レベルの用語としての「乱心」が、並行してもちいられ、後者は主に結果としての社会的不適応行動（殺人、自殺など）に際して用いられた。

明治に入り、精神医学の領域ではドイツ精神医学が導入される。呉秀三によるクラフトーエービングおよびクレペリンの体系の導入は先ほどもみたが、日本の近代精神医学はそうしたクレペリン体系に基づいて、その後の発展をとげ、狂氣はそれまでの「氣の間ちがい」といわれるような日常的なこと

ではなくなり、脳病、神経病という疾病となつた。

「神経病」は江戸時代から、精神・心の病を含んだ中枢神経系の病氣の総称であつたが、呉秀三、三浦勳之助が中心になって明治三十五年につくられた神経病学と精神病学の「日本神経学会」は本格的な専門誌『神経学雑誌』を創刊する。創刊号の「序」に、「精神病」あるいは「神経病」について次のように述べられている。

「或は精神病と云ひ、或は神経病と名づくるも、等しく是れ神経器官の機能障礙にして、其徴候に多少の差異あるのみ。兩者の間毫も劃然たる限界の存するを認めず、機能的神経症の如きにありて殊に其然るを見る」

近代精神医学、とくにドイツ医学の方法を用いた精神科医療施設として、明治八年の京都府立癲狂院（明治十五年、私立京都癲狂院に引き継がれる）、東京では、東京府癲狂院が設立され、これが明治二十二年の東京府果嶋脳病院となる（現在の都立松沢病院）。呉秀三は東大医学部精神病学講座の教授になるとほぼ同時に、この東京府果嶋病院医長となつてゐる。明治三十年代は、「脳病院」という名で、東京近辺だけでも、明治三十二年からの十年間に、東京脳病院、戸山脳病院、帝国（青山）脳病院、新宿脳病院、加命堂（旧小松川）脳病院、大久保脳病院、横浜脳病院の私立病院が誕生している。



明治二十年代、精神病、狂気は、天才や芸術と結びつけて論じられてもいる。明治二十年に創刊された月刊誌『哲学会雑誌』は、明治二十五年から『哲学雑誌』と改名されるが、同年「天才と狂気」（同年第七冊六十六号）と題された記事があり、イタリヤの精神病理学者で犯罪人類学の創始者であるチェーザレ・ロンブローゾ<sup>①</sup>や、フランスの精神病理学者モロー・ド・トゥール<sup>②</sup>の説が引かれている。ロンブローゾは法医学者、精神病学者として高名で、犯罪者の医学的・人類学的研究で知られていた。性犯罪者は生来、特徴的な徴候（変質徴候）と精神的標識をもち、必然的に犯罪者になるべく運命づけられている、といった学説を提唱した。その学説は今日では否定されているが、実証的な犯罪学の出発点となったといわれている。さてロンブローゾはすでに、同誌第二号から紹介されている。遺伝学者フランシス・ゴールトン<sup>③</sup>の名は第一号から登場している。また呉秀三も先にみた『神経学雑誌』にロンブローゾの紹介文を書いている。

さてこの記事では実験的方法が強調され、天才たちの身体上の特性も述べられる。たとえば、カントやダンテは「頭蓋不揃」で、カントは「過短なる頭を有し、後頭骨の上部と下部の不釣合」が著しい、というように。そして、「ロンブローゾのいへる如く天才は或心理的官能の下劣なるによりて

往々期望せらるる如く又其光榮の淵源なる所の機関に於ても変状を備えたり」と結ばれる。<sup>④</sup>

こうした傾向の記事は次号もつづくのだが、そうしたなかで見られるのは一種の生物学的決定論と科学的還元主義である。さらに明治二十七年の第九冊八十七号では、「天才狂者と氣候の關係」という記事が掲載される。そこでもロンブローゾの言を引用することから出発して、「天才の事業と狂者發生の時期」がいかに氣候温度に關係するかを示していく。一年のうち何月に狂者の發生が多いかというロンブローゾの統計と、それに対応するかたちで東京巣鴨病院で調査された「癲狂者」<sup>⑤</sup>發生の報告が折れ線グラフで示されている。そうして狂者發生月の折れ線グラフと、ヨーロッパでの美学的著作、天文学上の発見、理化学上の研究を月ごとの表に結びつけている。<sup>⑥</sup>

そして明治三十一年には太田秀穂の「天才と勉強」（第十三冊一三一—一三三号）が発表されている。「天才は<sup>⑦</sup>天才を愛するの力」とみる。「哲学は純粹の理學にあらず僅かの想像を許すものなり」として、プラトンの *Pathos*、デカルトの *admiration* などをあげる。天才の無意識性、熱中性、編性、精神の広大などの特徴を説明したあと、二つのことが強調される。「天才は憂鬱なるを常とす」と、その憂鬱性がとりあげられる。天才には憂鬱に勝つ力があること、したがって希望的憂鬱である、と。次に強調されるのが、「天才は勉強家

なり」。「天才は物に理想を与ふるの力」であり、勉強を要する。そして最後に、いかに勉強すべきか、の問いとなる。

明治十年ころの若者たちには立身の熱望がひろまっていた。福沢諭吉の『学問のすゝめ』とともにその基盤となっていたのは、中村正直訳のベストセラー『西国立志編』である。前者は明治十年ころまでに二十万部、後者も十数万部を売った。

『西国立志編』が底本としたスマイルズのテクストは、勤勉、立身、成功をすすめる、その根底には英国中流階級の、禁欲的、克己的、活動的な労働倫理がみられる。さらに発明家、機械工、思想家らを、高貴な労働者と称え、多くが労働者階級の出身であり、しかも、天才というより科学的・合理的な精神をもった勤勉家であると説いている。こうした主張が、労働者階級の上層・教育重視層の上昇願望を刺激し、これはまた、『西国立志編』の漢文調の日本語をもって、幕藩体制から閉め出された貧乏士族の伝統的・儒教的な勤勉・立志の精神と共鳴して立身熱を鼓舞したとされる。

その訳者、中村正直は一八六六年、留学を志願して幕府によつてイギリスに派遣された(勝海舟も含まれた十四名の国費留学生のひとつとして)。明治八年に開設されたお茶の水女子師範学校では、寸暇を惜しむ勤勉さが学生の眼に映じていたが、晩年にいたって過労がたたり不眠症に悩み、脳溢血

で倒れる。勤勉・立志・立身の思想基盤をもたらしたこの訳者みずから、神経病で没したことになる。

『西国立志編』は士族層の立志・立身熱の導火線になったともいわれる。学制の設置、帝国大学・高等学校等のエリートコース、官僚制ができあがる明治二十年前後から、「神経衰弱」や「神経病」は脚光を浴び始め、さまざまな著作や、雑誌・新聞記事にまで多くの例がみられる。

神経衰弱の例に新渡戸稲造がある。新渡戸は十三、四歳で「メランコリー」を経験し、十七、八歳のころ、「非常な憂鬱」に陥り、「十八、九歳のころより十年間計り煩悶に煩悶を重ねて、人生を悉く否定せんばかりに陥った」。

自己を律する規範性の強い努力型の人で、几帳面な完全主義者であり、自罰的傾向もあった。南部藩士だった父の死後、母は、名をなして家名をあげよと、つねに叱咤し、東京遊学に出したあたかも手紙で教訓をたれ続け、「功名手柄を遂げ得る」ことは新渡戸の「心を悩ます種」であった。こうした形成をもつ新渡戸の「神経病」「神経衰弱」は、メランコリー親和型性格ともいえる。このタイプの人々は、自己に対して要求水準が高く、その水準に達しないと負い目を感じ、その先鋭化が前メランコリー状況を生み、これが限界を超えると鬱病を発症するとされる。

さらに度会好一氏の分析によれば、没落士族の長男、北村

透谷の立志と脳病も、少年期の「氣鬱病」、執拗な焦燥と自責、自殺……とかかわっている。透谷の「脳病」(あるいは「氣鬱病」)も、鋭敏な感受性の上に、あるべき自己にむかつて現実の自己を追い立てる立志型・向上型の明治の心性に深くかわる氣分障害、おそらく鬱病の一例と度会氏は結論づけている。また、母親が、家名再興の望みを息子にかけ、小学生時代も毎夜十二時まで書机にしばりつけるなど、透谷が「女將軍」と名づけるような激しい存在として透谷を叱咤激励したのだ<sup>17</sup>。

正岡子規のいとこ藤野古白の自殺も鬱状態の自殺とみられるし、当時、果鴨病院にあつても、鬱状態での自殺が多かった。また、二葉亭四迷の「神経衰弱」も、新渡戸や透谷と同じく鬱病であつた<sup>18</sup>。

このように、メランコリーはこの時代に充満していたようだ。著名作家の自殺、当時の「鬱狂」と診断される人々、鬱状態での自殺の増加……等々。「鬱」が時代の底流となつていたことが見てとれる。そして、日本的ともいえる母性原理——母親の存在と結びつきの強さ、深さも垣間見られる。

## 2. 憑依

明治初めの高名な落語家、三遊亭円朝は、「進行性麻痺続

発性脳髓炎」で、あきらかな精神障害をともない、六十二歳で死んでいった。その「真景累ヶ淵」は「神経累ヶ淵」ともかけられ、そこには、表層の「幽霊＝神経病」と、深層の「怨霊・御霊信仰(加えて仏教の因果説)の重層構造がみられる<sup>19</sup>」。「人を殺してものをとるといふような悪事をする者には必ず幽霊があります。是が即ち神経病といつて、自分の幽霊を背負っているようなことをいたします。」(円朝「真景累ヶ淵」)

円朝の構えは重層的で、幽霊の出現を神経病の所産としながら、反面、幽霊の実在を主張している。当時の文明開化の中では、死者の怨念の結晶ともいえる幽霊や怨霊、憑きものなどは、神経の作用として狂氣の世界に封じ込められる。しかし円朝はこ<sup>20</sup>ういう。

「おつしやるとおり、幽霊は神経病でしょう。でもあります。確かにある。ある種の人々は自分の幽霊を背負っている。その幽霊は人間の心の奥底の暗い淵から出てくるのです。」

「怨霊を恐れる」「怨霊が憑く」といった、怨霊や幽霊と精神障害のつながりは平安時代、あるいはそれ以前から見られる。憑くのは怨霊だけではない。狐、狸、蛇、また犬神などもある。古くから日本では、憑依の現象が狂氣と密接している。狂氣の病態として「もの憑き」が、近世近代にいたるま

での前提にあり、そのことが日本人の自他の未分化の心性、個人の人格的境界の脆弱さと関係するという説もある<sup>②</sup>。そしていづれにしても、本稿「――」でもみたように、明治の近代精神医学の移人とともに狂気は、それまでの伝統的に「気の間ちがい」といわれるような、日常レベルのことではなくなり、「脳病」「神経病」という疾病となったのだった。

西欧精神医学が輸入されるまでの、日本および中国の狂気観に次のような特徴があったことも指摘される。東洋の民話のなかで言及されている狂気は、祖先の霊や天狗、狐など、超自然的存在の憑依によって、急激にひきおこされ、かつ祈禱その他憑きものを追い出すための方法がとられ（時には乱暴なやり方であっても）、急激に治癒するもの、とみられていた。精神障害の原因が憑きものだとしても、中世―近世ヨーロッパのように、精神病者は悪魔（神と対立する）と契約した者だとする考えのない日本では、病者はある意味で無辜の犠牲者ということになり、そのうえ、狂気が可逆的でもある、ということになる。

しかし、明治の「脳病」「神経病」の概念の導入により、狂気は脳病に転換する。「脳が悪い」のであれば、たんに狐を追い出して簡単に治癒するようなものではないことになる。そして、円朝の嘶に表れているような、江戸庶民の情念の世界では存在していた幽霊も、明治の開花のなかで逐われ

はじめる<sup>③</sup>。

明治六年、政府は憑祈禱などを禁止し、翌年、禁厭祈禱によって医療を妨げてはならない、との布告を出した。呪術的行爲の禁止である。明治六年、憑祈禱禁止の法令を受けた同年三月の司法省令によれば、種々の祈禱が当時なお、精神病者に対する治療法として実施され、「湯火」や「白刃」が精神病者の肉体を傷つけていたことをうかがわせる。明治七年、精神病者を社会にとつて危険な存在と位置づけ、家族の責任において隔離しようとする布達が出された。「監護」という用語もあらわれ、隔離―監禁されるべき存在として精神病者を表象する。明治九年の警視庁達には、「狂気癲癇」が「諸病及び伝染病」、「不潔悪臭腐敗物」などと共にあげられ、「衛生」の思想との関連がみられる。明治十一年の警視庁達によれば、「不良ノ子弟」も一緒に入れられていることがわかる<sup>④</sup>。

「文明開化」的合理主義にみえるこうした流れのなかで他方、明治六年にはまた、紀元節が制定された。そして、前年の「三条の改憲」（敬神愛国、天理人道、皇上奉戴・朝旨遵守）を定めた、神仏合同の布教によって、国民を天皇崇拝へと導こうとした宗教政策の一環として、六年、神官と僧侶を教導職に任じて大教院を設立。その後、紆余曲折があり、祭

教分離（神社は祭祀であつて宗教ではないという）つまり政教分離の建前をとりつつ、国家神道、祭政一致の方向がとられていく。

民衆の神経病にはさまざまなかたちでの憑依がみられ、天皇崇拜と結びついた憑依妄想もみられる。天皇制の宗教的表現といえる国家神道が呪術を温存する仕組みであることや、民衆層にあるさまざまな太陽崇拜を皇祖神アマテラスに從属させようとしたことなども関連づけられ、文明開化を謳った近代国家の中に呪術が温存される仕組みがみとめられる。祈禱性精神病、憑依現象が絶えない文化の土壤の指摘される所以である。西洋化を急ぎながら、天皇制は祖靈崇拜を包み込んだ家族国家観や国家神道をもち、個人の自立を抑圧することにもなり、それは同時に、近代国家の中心に呪術を温存し、日本的な憑依を生み出し続ける土壌となった。

### 3. 神経衰弱、メランコリー——漱石の場合

夏目漱石は明治三十三年（一九〇〇）ロンドンに留学するが、漱石がロンドンで意識した「神経衰弱」は知られている。不快感と鬱状態である。当時、西洋文明摂取は、福沢諭吉も主張するとおり、欧米列強からの植民地化を防ぎ国家の独立を守りぬくための方策でもあった。だがまた諭吉は、『文明論

之概略』で、文明をとらえる二つの側面を区別している。ひとつは、衣食住や生活様式、外的事物などの、目に見える「有形」の文明。もうひとつは「内に存する精神」における「無形」の文明である。異なった文明を輸入するとき、後者の「無形」の部分を変革することの方がはるかに難しいことを諭吉は説き、文明とは「智徳の進歩」、しかも少数エリートではなく「人民一般の智徳」であることを強調している。英文学研究の場合、有形の文明や技術を摂取するのではなく、それを作りだした「文化」「こころの習慣」を理解することだったのに、自分の趣味は「頗る東洋的発句的」だと、漱石は述べている。英文学を異質に思い、面白く感じなかったようだ。

漱石がロンドンで感じた不安や不快感は、後進国の学生が先進国へ留学した際に覚えるアンビヴァレントな気持ちのうえに、外国人としてイギリスの国文学を学ぶという立場に立たされたために、二重に悪化したものと指摘されるが、漱石はさらに、近代英国の進歩に対して、「どこまでいっても休ませてくれない」「ストラグルを好む」と、休息なき西歐文化を感じとっている。

「比ノ一篇二伏在セル主意ハ開花二厭キナガラ開花ヲ廢スル能ハザル十九世紀末ノ人心ノ不安トアキラメト希望

トラヨク示セリ」。

「断片」には次のような言葉までみられる。

「○ Self-consciousness の結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり。人智、学問、百般の事物の進歩すると同時に比進歩を来したる人間は一步一步と頽廃し、衰弱す」

そして明治四十四年の講演で、開花についてもこう述べている。

「既に開花というものがいかに進歩しても、案外その開花の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらしななければならない心配を感情に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変わりはないさうである事は前お話しした通りである上に、今言つた現代日本がおかれたる特殊の状況によつて吾々の開花が機械的に変化を余儀なくされるためにはただ上皮を滑つて行き、また滑るまいと思つて踏張るために神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか憐れと言わんか、誠に言語道断の窮状に陥つたものであります。」

この文明化は、西歐の「開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る余裕をもたない」過程であり、その文化や精神を理解し身につけようと「踏張る」と神経衰弱になるような、心の空虚さや苦しさがつきまとう。

漱石の死は大正五年となるが、多くの新聞がこれを報じている。そのなかに死体解剖にかんする記事がある。長与又郎医学博士による解剖所見で、『東朝』を初めに各誌が掲載している。

脳が普通の人より重く、かつ皺が多い、ということに加えて、天才と心の病がストレートに結びつけられている。しかもそれは、医学博士の解剖所見という「科学的」根拠をもち、前章でみたロンブローゾまで引かれている。病気になる、自分に誰かが悪口を言っている、と言うような追跡症がみられ、それは解剖の結果わかるものではなく、糖尿病の患者におこる。さらに、天才の人にある狂的発作としてみるべきで、ロンブローゾのいうような天才と狂者の結びつきともいえる、と。

長与医学博士は翌年『新小説』に、これについての文章を寄せている。頭部と腹部の解剖結果を述べたあと、次のように結論している。「事実、糖尿病患者には、よくメランコリーに陥ることがあつて、……自殺をさえ決行する。……糖尿病を治

療すると、こうした精神症状も同時に治癒することがある。追跡症は……糖尿病患者に起る症状であるばかりでなく、天才の人に往々認められる発作である。ロンブローゾの如きは、多くの天才的の人は、種々精神病的症状を現はすものであつて、時としては全く精神病者さへある、云ひに換へれば、天才は精神病患者に異ならない、とまで云つてゐる。……」

そして漱石の死の報道に關していくつかの新聞に載せられた写真は、現代の私たちにも知られているあの、頭を右手にもたせかけて右ひじをついているポーズである。このポーズは西洋の文化においては「メランコリー」の圖像——古代から中世をへて、デューラーの名高い版画「メレンコリア」で不動のものとなる——として知られている。

先ほど本稿三一で明治期に充滿していた鬱状態、メランコリーの一端をみてきたが、漱石の遺したこうした圖像が、西洋のメランコリー圖像と重なるのは興味深いことだ。西洋近代においてもデューラーの圖像からなお、近代をとおして現代にいたるまでメランコリーは大きな課題となつてゐるのだから——知力・天才と直結したルネッサンスのメランコリー、近代バロックの喪とメランコリー、十九世紀のロマン派、そしてフロイトの概念からラカンの、いわば構造的メランコリーにいたるまで大いなる水脈となつてゐる。近代を覆つてゐるメランコリーは多様で具体的な表現をもつが、し

かし同時に、それは主体、特に近代の主体にとって根底の一端をなしてゐる。

- (1) 木村敏「人と人の間」弘文堂、小田、前掲書、一六一ページ。
- (2) 小田、前掲書、一六一—一六二ページ。
- (3) 小田、前掲書、三五三—三五六ページ。
- (4) 「神経学雑誌」(一九〇二)一卷、一二二ページ。度会好一「明治の精神異説」岩波書店、二〇〇三、二九—三〇ページ。
- (5) 小田、前掲書、三五—三五三ページ。
- (6) 度会、前掲書、一三—二四ページ。
- (7) C Lombroso (1835-1909). Cf. Y・リーバ「女性と狂気」拙訳、平凡社、一九九三、二五ページ参照。以下にロンブローゾの収録した犯罪者の肖像と頭蓋骨の写真集「犯罪者図鑑」(二八七八)に収録したもの( )がみられる。拙訳G・ディディユベルマン「アウラ・ヒステリカ」リブローボート、一九九〇、八—一八三ページ。なおゴールドトンの「人間の能力とその発達の研究」(一八八三)の口絵、合成肖像の標本写真も同書八一ページにある。
- (8) Moreau de Tours (Jacques) (1857-1899). シャラントンのエスキロルのもとで研修医となり、患者に同伴して中近東諸国を旅行したことがきっかけで、ハシユシュの研究をまとめる。のちサルペトリエール病院に長く勤務し、狂気の研究を「純然たる神経の疾患」とみなし、薬物療法に活路を見出した。精神療法には否定的な立場をとった。拙訳Y・リーバ「女性と狂気」、二七—二八二ページ参照。
- (9) 「医学者としてのロンブローゾ博士」(「神経学雑誌」明治四十四年第九卷)。岡田温司「ミメシスを起えて」勁草書房、二〇〇〇、六ページ。
- (10) 岡田、前掲書、二三四ページ。
- (11) 同、六五ページ。
- (12) 「哲学雑誌」第九冊八十七号、明治二十七年、三八七ページ。

(13) 『哲学雑誌』第十三冊一三二—一三三号、明治三十一年、七五—八五ページ。

(14) 以上は、度会、前掲書、五九—六〇ページ。

(15) 同、六五ページ。

(16) 同、六八ページ。テレンバッハ『メランコリー』一九六一。

(17) 同、七二—七八ページ。

(18) 同、八四—八九ページ。

(19) 同、九五ページ。

(20) 小田、前掲書、三五—三六〇ページ。

(21) 宮本忠雄『日本人の精神構造』「からだの科学」七十九号、日本評論社、一九七八、『断断・日本人』日本評論社、一九七四。

(22) Veith, I. The East, in: Howells, H. ed. *The World History of Psychiatry*, Baillière Tindall, London, 1975. 小田、前掲書三五六ページ。

(23) 円朝はその死とともに、江戸市民文化の持っていた御霊や憑きものの世界をあの世へ運んでいったといえるかもしれない。新しい明治政府の権力者たちは御霊におびえて弱手に手加減するようなことはなかった。江戸時代の社会ではたとえば、町内で共同で面倒を見ていた知恵遅れの人があつたり、そのほか寺院弟子とか、巡礼や旅芸人など、正常な常民の社会に適応できない非順応型の人々のための座があつたのだが、明治の社会はこれらのものを破壊した。庶民は、文明開化の合理主義、立身出世、忠君愛国などに追い立てられ、息もつかないことになるだろう（小田、前掲書、三六一—三六二、三六八ページ）。

(24) 柴市郎『狂気をめぐる言説——「精神病患者看護法」の時代』『メディア・表象・イデオロギ——明治三十年代の文化研究』小沢書店、一九九七。さらに、明治三十年代にあたる期間は、明治三十三年に公布された精神病患者看護法に象徴されるように、精神の病あるいは狂気が近代日本の国家体制に組み込まれていく過程において重要な意義を持つ。そして明治三十三年、国内体制再編期「社会ノ安寧」という立場から、治安警察法と精神病患者看護法が公布された。同年にはまた、感化法も公布されている。風俗や身体

- ベルでは、明治三十年代前半は、内務省による婦人裸体画取締強化（明治三十一）、未成年者喫煙禁止法（三十三年）、内務省による、男女混浴禁止の（三十三年）、警視庁による東京路上見世物禁止（三十四年）など、多方面にわたる取締・禁止に関する法令が出されている。これらの風俗改良にかかわる法令は、人間の身体に關わるものである。裸体画は身体表現の問題のもかかわるが、こうして精神病患者看護法と同時に、身体管理をめぐる様々な法令が出されている（同書一〇一—一九九ページ）。なお明治初期における「人体」表象と解剖については次の論文を参照。香西豊子「解剖台と社会」『思想』九四七号。
- (25) 度会、前掲書、一四九—一五二ページ。
- (26) 同、一〇四—一一二ページ。
- (27) 野田正彰「漱石らの病理からこの国の心の病を解く」（度会、前掲書への書評、東京新聞二〇三・五）。
- (28) 福沢諭吉『文明論之概略』（明治八、一八七五）岩波文庫版三〇〇ページ。「国の独立は目的なり、今のわが文明はこの目的に達するの術なり。此今の字は特に意ありて用ひたるものなれば、學者等閑に看過する勿れ。諭吉は「断じて西洋の文明を取るべきなり」と主張している。（度会、前掲書、二二〇ページ）。
- (29) 拙論「日本の近代化における西欧的自我の不在」、「文化の受容と変貌」文化書房博文社、一九九三、一五—一五二ページ。
- (30) 度会、前掲書、二二二ページ。
- (31) 平川祐弘、『夏目漱石』講談社学術文庫二二二ページ。
- (32) 『漱石全集二七巻』、岩波書店、一九九五、一六二ページ。度会、前掲書二二七ページ参照。
- (33) 『漱石全集第十九巻』、二〇四ページ。
- (34) 「夏目漱石『現代日本の開花』（私の個人主義）」講談社学術文庫六四四ページ。
- (35) 岡田、前掲書、三二—三三三ページ。
- (36) 長与又郎『夏目漱石氏剖検』（大正六年）平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成』第三巻、日本図書センター、平成三年、一〇ページ。



(岡田、前掲書、三五ページ)。  
(37) 岡田、前掲書、三六一二七ページ。

本論文は平成十六年度科学研究費基盤研究 (C2-15520003) による成果の一部である。

(たにがわ・たかこ 筑波大学大学院  
人文社会科学研究科哲学・思想専攻教授)